

研究主題「相手の立場を考えながら、論理的に話す力・主体的に聞く力を 育成する指導の工夫

- 『プレゼンテーション』を取り入れた学習活動を通して - 」

東京都教職員研修センター 研修部教育開発課

世田谷区立九品仏小学校 教諭 渡部理恵子

研究のねらい

児童の「話すこと・聞くこと」の学習においては、各種学力調査の結果等から、聞き手が納得するように論理的に話すこと、話し手の伝えたいことは何かを理解したり考えたりしながら聞くことに課題のあることが指摘されている。

平成 19 年に出された文部科学省言語力育成協力者会議の報告書案においては、「論理的に考え表現する力を育成すること」や「相手の発言をしっかりと聞き取り受け止めること、状況に応じて的確に返すこと」を含めた「聞く力」を育てる指導を重視すること等が示されている。

以上の点から、自分の考えを明確にして相手に分かりやすく伝える「論理的に話す力」と、聞き取ったことを基に自分の考えをまとめ、それを積極的に相手に返す「主体的に聞く力」を育成することが必要であると考え、本研究主題を設定した。

研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 論理的に話す力・主体的に聞く力の育成における「プレゼンテーション」の活用

「プレゼンテーション」は、話し手が提案を効果的に伝えることで、聞き手の理解を深めると同時に、判断や意思決定を促す積極的な言語活動であるとされている。

本研究では、「プレゼンテーション」を「一定の時間内で特定の聴衆に対し、話の順序・組立て・話し方等を工夫して話し手の考えや意見を分かりやすく説明し、聞き手の判断や意思決定を促す効果的な言語活動」と定義した。

「プレゼンテーション」において、話し手は必要な情報を整理し話の構成を考え、内容を分かりやすく効果的に伝える方法について工夫をする等、聞き手を説得する働きかけを行う。一方、聞き手は、話し手の話の要旨や意図、自分の考えとの共通点や相違点を考えながら聞き、質問したり感想を述べたりしながら意思決定をするという主体的な聞き方が求められる。

このような相手意識が非常に高い言語活動である「プレゼンテーション」の指導を通して、効果的に「論理的に話す力」と「主体的に聞く力」が育成できると考えた。

(2) PISA 型読解力の読解プロセスを参考にした「プレゼンテーション」の学習過程の工夫

文部科学省の「読解力向上プログラム」(平成 17 年 12 月)では、小学校学習指導要領国語で重視している「自分の考えをもち論理的に意見を述べる能力」、「目的や場面などに応じて適切に表現する能力」、「目的に応じて的確に読み取る能力」は「PISA 型読解力と相通ずるものがある」と示している。

なお、「読み取る能力」に関しては、「読解力向上プログラムの全体像」に「読む(聞く)」と図示されていることから、「聞き取る能力」と解釈することができる。

このことから、PISA 型読解力における読解プロセスを参考にして、「プレゼンテーション」を行うための学習過程を以下のように設定することとした。(図 1)

「相手の立場を考えながら、論理的に話す力・主体的に聞く力を育成する指導の工夫
 - 『プレゼンテーション』を取り入れた学習活動を通して - 」

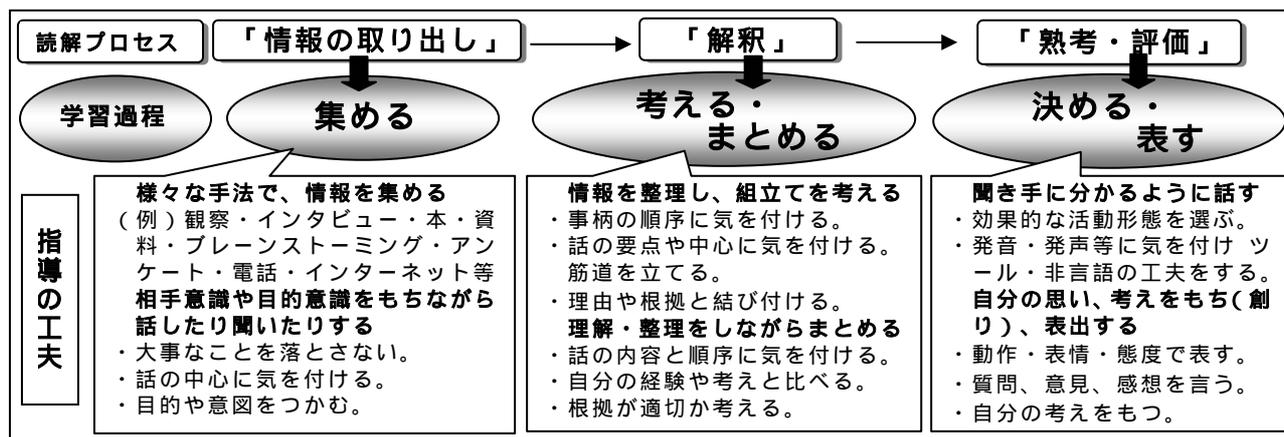


図1 PISA型読解力の読解プロセスを参考にした「プレゼンテーション」の学習過程

2 研究仮説

「話すこと・聞くこと」の学習に「プレゼンテーション」を取り入れ、「集める」「考える・まとめる」「決める・表す」の三つの学習過程における指導を工夫することにより、相手の立場を考えながら、論理的に話す力と主体的に聞く力が育成できる。

3 カリキュラム開発

(1) 論理的に話す・主体的に聞くために児童に付けたい力の明確化

論理的に話す力・主体的に聞く力を育成するためには、児童に付けたい力と指導事項を明確にして指導することが必要である。そこで、学習指導要領や先行研究等から、「児童に付けたい力」とその力を付けるための「具体的な学習方法やその指導方法」について整理した。

「プレゼンテーション」の特徴に着目し、話すことにおいては、「論理的に話すために付けたい力」と話の組立てや発音・発声・言葉遣い、視覚的なツールや非言語に指導事項を分けた一覧表を作成した。(表1) 聞くことにおいても、「主体的に聞くために付けたい力」と具体的な聞き方、聞く観点、非言語に指導事項を分けて作成した。

表1 論理的に話すために児童に付けたい力の表(概要)

学習過程	論理的に話す力	指導事項			
		話の組立て	発音・発声・言葉遣い	視覚的なツール等	非言語
集める	低・中・高学年のそれぞれの学年において、付けたい力を三つの学習過程に分けて示す。	伝えたいことの整理の仕方、論理的な構成にするための具体的な内容等、技能を含めて示す。	発音、発声、口形、音量、速さ、強弱、言葉遣い、声の調子、抑揚など、話し方の技能を中心に内容を示す。	視覚に訴える方法や道具を示す。	姿勢、態度や表情、身ぶり手ぶりや視線等の内容を示す。
考える まとめる					
決める 表す					

(2) 「プレゼンテーション」を取り入れた「話すこと・聞くこと」の年間指導計画例

国語科の教科書教材の単元構成を生かしながら、日常的な活動や他の教科との関連にも配慮した論理的に話す力・主体的に聞く力を育成する年間指導計画例を作成した。

国語科では、「話すこと・聞くこと」の単元を中心に児童に付けたい力の習得を図り、「書くこと」等、他の領域の単元でも活用できるようにし、年間を通して「話すこと・聞くこと」の学習が継続できるようにした。また、国語科で身に付けた力が学校生活や他の教科等の学習に生きて働く力となるよう、朝のスピーチ等の日常的な活動、他の教科との関連における具体的な活動例を例示した。

4 実践研究（第4学年検証授業）（4年1組30名対象）

(1) 単元名 「分かりやすく工夫して伝え合おう」

教材名 「みんなで遊ぼう集会」を開こう＜学級で話し合おう＞（教育出版4年国語上）

(2) 単元の目標

- ・ 自分の考えた「みんなで遊びたい」遊びのよさを、分かりやすく伝え説得するために内容を整理したり、話の組立てを考えたりしながら、「プレゼンテーション」を行う。
- ・ 話の中心に気を付けて自分の意見と比べながら聞き、質問したり意見を述べたりする。

(3) 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語についての知識・理解・技能
ア)「みんなで遊ぼう集会」で遊びたい遊びについて興味をもって調べたり考えたりしている。 イ)友達に分かりやすく伝え説得するための方法を知り、プレゼンテーションを進んで行おうとしている。	ア)自分の考えが分かるように、大事なことを先に言うなど話の組立てを工夫して話している。 イ)話の中心に気を付けて聞き、自分の意見と比べながら、質問したり意見を述べたりしている。	ア)グループ内での話し合い、学級の中でのプレゼンテーションに対し、適切な音量や速さで話している。 イ)分かりやすく伝えるための構成の仕方を理解し、活用している。

(4) 三つの学習過程と指導の工夫

「話す力・聞く力」を付けるために、三つの学習過程と具体的な指導の工夫を設定し、7時間扱いで検証授業を行った。

論理的に話す力を付けるための指導の工夫

時	学習過程	指導の工夫	内容・方法
1	学習の見通しをもつ	・モデルの提示	・相手意識・目的意識をもち、「プレゼンテーション」の方法を知るために教師がモデルを示す。グループ内で遊びについて話し合う。 【関・意・態イ】
2	集める	・ブレイクストーミング	・グループ内で「遊び」のよさを見付け、説得する材料とするためにブレイクストーミングを行う。 【関・意・態ア】
3 4	考える まとめる	・短冊カードや付箋を使ったナンバリング	・条件に合っているか、説得力があるか考えて、重要なものから順序立てて話せるように短冊カードや付箋を使い、話す順番を考える。 ・「プレゼンテーション構成メモ」を作成する。 【話・聞ア】
5 6 7	決める 表す	・ビデオによる振り返り ・交流タイム	・リハーサルをビデオに撮り、自己評価を行いよさと改善点を見付ける。 ・「プレゼンテーション」聞き手の反応を見ながら話す。【言語ア）イ】 ・「交流タイム」聞き手の質問や問い返し等に対して、根拠に基づいて答える。

主体的に聞く力を付けるための指導の工夫

＜事前資料：アピールチラシ＞

6 7	集める	ラ（事前資料）のピクト示シ 夕交流タイム	・事前に配布された、「アピールチラシ」に目を通すことにより、話し手の主張に着目する。【関・意・態ア】 ・表情やしぐさ等の非言語情報にも注目して聞く。	みんなで遊ぼう集会 班のおすすめの遊び 遊びの名前 おすすめする理由を三つ グループの主張・説得理由
	考える まとめる		・自分の考えをもって聞くために、事前資料に同感した点、疑問や不明な点を「!」「なっとく」「?」「はてな」の記号で書き入れる。その点に着目して聞き、自分の考えと比べる。 【話・聞イ】	
	決める 表す		・「なっとく」うなずく、相づちを打つ、感想を言う。 ・「はてな」質問や問い返しを行う。【話・聞イ】 ・相互交流の後、再度アピールチラシに記入する。	

(5) 授業実践の結果

研究の仮説に基づく授業実践で、「論理的に話す力」と「主体的に聞く力」が育成されたかについて、児童の自己評価、発言記録、アンケート、児童の記入メモによって検証した。

論理的に話す力の向上

- ・ <児童の自己評価> 第1時の自己評価では、児童の全員が「プレゼンテーションの組立てが分かった」、約9割が「理由をはっきりさせて話すことができた」と答えている。結論を最初に述べ、理由や根拠を挙げていく構成についての理解を深め、実際に活動すること

を通して、構成を工夫して論理的に話をすることができたと考える。

- ・ <発言記録> 遊びを決める話し合いの場面において、発話の半数（発話数 24/48）は、大事なことを先に言い理由を述べる話の構成で話げできた。以下はその発話例である。

児童F：Eくんと同じで、 <u>ぼくも反対</u> です。もし取られた人が人に渡して走っていたら、それが悲しいし、 <u>仲良く遊べない</u> からです。
児童H： <u>ぼくは賛成</u> です。足の速い人はいっぱい逃げられるけど、足の遅い人はすぐにつかまってしまう。だけど、足の速い人がしっぽをあげるようにして、必ず一人一回はしっぽをあげるようにすればいいし、人数が少なかったら選べばいいと思います。

- ・ <アンケート> 授業前に行ったアンケートでは、人前で話すことが「あまり好きではない」児童が30名中15名であった。その理由として「どのように話してよいか分からない」ことを挙げている児童が多かった。しかし、授業後は、13名の児童が授業前に比べ「理由を付けて話すと、相手に分かってもらえる」「分かってもらえるとうれしい」とアンケートの回答にあるように、人前で話すことに対する自己肯定感を高めた。

主体的に聞く力の向上

- ・ <事前資料へのメモ> 事前資料（アピールチラシ）への書き込みから8割の児童が「分からなかったことや疑問が解決された」としている。特に、交流タイムで具体的に話すように求めたり、さらに知りたいことや不足していることに対して質問したりしていたことから、自分の考えと比べながら主体的に聞くことができたと考える。
- ・ <アンケート> 授業前と後で行ったアンケートでは、「聞くことが好きか」という項目に対して15名の児童が自己肯定感を高めた。学習のねらいを明確にし課題意識をもたせたことや聞く観点を明確にしたことで、「聞くこと」への意識の変容や達成感が見られ、主体的に聞く力の向上につながったと考える。

検証授業における課題

「話すこと・聞くこと」の学習における内容の指導と態度の育成を1単元の中で行うと、留意すべき点多すぎて深まりにくいことが分かった。児童の実態に応じて単元の指導事項を焦点化することが必要である。

研究の結果と考察

本研究で、学習に取り入れた「プレゼンテーション」は、相手の立場を考えながら話したり聞いたりする必然性があり、児童の相手意識・目的意識を高めることに非常に効果があることが分かった。また、「集める」「考える・まとめる」「決める・表す」の三つの学習過程を設定したことにより、指導の工夫が行いやすくなった。その結果、自分の考えを明確にし、相手に分かりやすく伝える力と、話し手の伝えようとしていることを聞き取り、それを基に考えをまとめ話し手に返していく力を育成する指導がなされ、「論理的に話す力」「主体的に聞く力」を伸ばすことにつながったと考える。

今後の課題

- 1 「プレゼンテーション」を通して育成された「論理的に話す力」「主体的に聞く力」を、「書くこと」等他の国語科の領域や他の教科等で活用できるよう、単元開発や学習展開の工夫をする。
- 2 自己評価・相互評価・教師による評価の在り方を探り、特に、とらえにくい「聞く力」についてはメモ・要約・コメント等、他の言語活動に置き換える等の評価の工夫をする。